

昭和十九年五月三十日發行

○ゾラーマアトラ河畔の風景 ○ボース首班大講演會
○アッサム州突入の日印同盟軍

卷頭言

●印度の獨立と大東亞の大義……………文學博士 宮本正尊…二

●印度獨立を宣明して日本國民諸君に訴ふ……………チャンドラ・ボース…三

●印度に於ける飢饉の今昔……………農學博士 早川直瀨…六

●邦樂の南方及印度進出問題……………日印協會 會…四

●ヒンヅウ政治制度と其の理論(一)……………ビー・ケー・サルカル…六

●印度回教問題に就て(三)……………廣瀨文雄…七

●印度の雨……………櫻井義肇…八

●印度回遊五千哩(七)……………谷一東…六

◎雜 著……………
○最近に於ける印度問題の經過○印度國內情勢の推移○大東亞共榮圈に於ける獨立運動の發展○假政府の對英米宣戰布告○ボース首班大東亞會議に出席○軍事情勢

◎印度緬甸方面日誌……………二四
◎會務記事……………二九

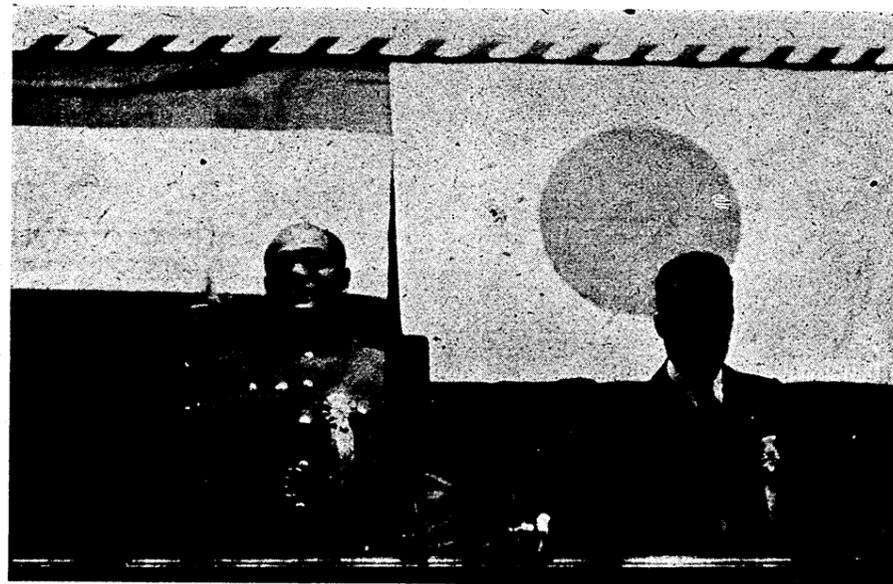
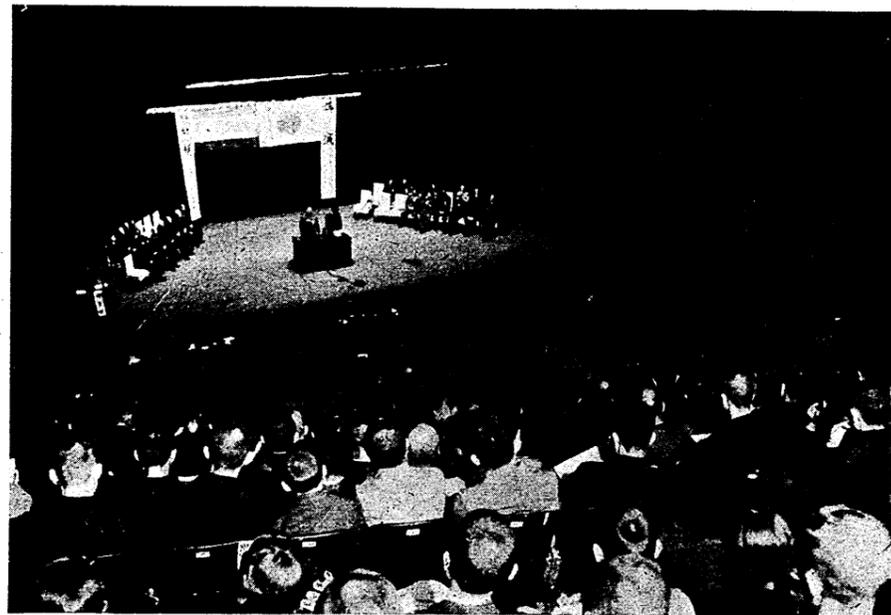
○ボース首班一行歡迎晚餐會○ボース首班大講演會○邦樂進出問題研究會○寄附行爲一部改正○理事の新任○理事の更迭○安川理事の逝去○印度反英抗爭史展覽會○日印協會評議員會○日印協會總會○印度國民軍激勵電報○會員の訃報○新入會員○會費領收報告



日印協會會報

第八十六號

ボース首班大講演會



部隊はチタゴン沖に進攻した。
 十一日 ボース首班は〇〇に待機する國民軍後續部隊を閲兵した。
 海軍航空部隊は甲谷陀を爆撃した。
 二十一日 ガンデー夫人重態に陥る。印度政府は特效薬ベニシリンを甲谷陀より空輸する事に決定した。
 二十二日 ガンデー夫人ブーナに於て逝去、享年七十四。
 二十九日 大本營はアラカン方面の作戰に就て次の如く發表した。
 一、二月九日以降英印軍第七師團主力をブチドン西北方シンゼイワ盆地附近に包圍猛攻中なりし緬甸方面帝國陸軍部隊は、二月二十四日迄に其の大半を殲滅し、目下一部を以て殘敵を掃蕩しつゝ、更に爾後の作戰準備中なり。二、印度國民軍亦我と協力して大なる戰果を擧げつゝあり。



マニプールの藩王國素描

マニプールは其の周邊を丘陵によつて取圍まれた一大盆地であつて、總面積は約八千六百平方哩、盆地の長さは約三十哩、幅は二十哩である。盆地を流れる主なる河川はイムパール、イリル、トバル、ナムバル及びナムボールの諸川である。ナムボール川は一旦ロクタック湖に注ぎ更に同湖水から流れ出してコイルタック川となる。
 マニプール盆地は往昔一大湖水であつたと認められて居るが、現在其の痕跡としては長さ八哩、幅五哩のロクタック湖が残つて居るに過ぎない。
 盆地は海拔約二千五百呎の高地であるから、氣候は涼しく快適である。冬期には夜間多量の霜が降り、太陽が中天に昇る迄深い霧に閉ざれることが屢々ある、首都イムパールに於ける平均年雨量は約七十吋であるが、丘陵地帯では百吋にも達する。

會務記事

ボース首班一行歓迎晩餐會

自由印度假政府スバス・チャンドラ・ボース首班は其の關係、參謀長等一行と共に來朝したるを以て、本會に於ては去る十一月七日午後五時より大東亞會館に於て歓迎晩餐會を開催せり。開宴後先づ大隈會頭の歓迎の挨拶後、ボース首班は在印米英軍撃滅の烈々たる決意を表明し、引續き種々懇談を交へて午後七時半一旦宴を撤し、來賓並に本會幹部は歌舞伎座に於ける大東亞外務兩大臣招待の觀劇會に臨みたり。歓迎晩餐會の出席者左の如し。(敬稱省略)

- 來賓
- 首班 スバス・チャンドラ・ボース
 - 國民軍參謀長 ジー・ケー・ボンズレー
 - 無任所大臣 エ・エム・サハイ
 - 最高司令部付 ラヂュー軍醫中佐
 - 首班秘書 ハッサン

- 最高顧問 ラスピハリ・ボース
- 出席者
- 深井龍雄 株式會社
 - 廣井辰太郎 富士瓦斯紡績
 - 廣瀬又六 橋本幸太郎
 - 平井正信

會務記事

大隈會頭挨拶

- | | | |
|---------|----------|--------|
| 池田嘉吉 | 生尾太郎 | 石橋鎮雄 |
| 楠坪正義 | 木村日紀 | 北川要之助 |
| 北澤直昭 | 侯爵小村捷治 | 來馬琢道 |
| 葛生能久 | 鹿子木貞信 | 榊源次郎 |
| 松浦徹夫 | メタニ | 三宅哲一郎 |
| 宮田榮太郎 | 三角佐一郎 | マンガンマル |
| 永島義治 | ナイ | 永田藤次郎 |
| 中川末吉 | 夏秋龜一 | 根岸由太郎 |
| 西巖 | 野口米次郎 | 沼野英一 |
| 岡田永太郎 | 岡田守惠 | 侯爵大隈信常 |
| 岡倉古志郎 | 尾上次六 | 太田三郎 |
| 大谷登 | 大鳥居彦司 | 大塚俊雄 |
| 大槻房江 | ラムムルテ | ラムチャンド |
| リンガム | エヌ・エス・セン | 相馬愛藏 |
| 坂上健次 | 紫田一能 | 子爵澁澤敬三 |
| 澁谷友三郎 | 信夫淳平 | 鹽澤昌貞 |
| 副島八十六 | 高島正雄 | 高岡大輔 |
| 瀧照道 | 高島米峰 | 田中善立 |
| 田中完三(代) | 上野福三郎 | 高良富子 |
| 山本三藏 | 柳喜美子 | 矢谷一郎 |
| 米澤菊二 | 吉田勳生 | 吉田丹一郎 |

大東亞の戦局が愈々熾烈の度を加へつゝある今日、亞細亞に於ける最も古く最も偉大なる印度國民の指導者各位を迎へて、本日此處

に小宴を開催するを得ました事は、我々の最も欣幸に存する次第であります。

印度は二百餘年に互つて英國の極權下に呻吟して参りました。其間英國が印度國民に對して行つた壓迫と搾取と暴虐との歴史は我々一同の能く承知して居る處であります。今日の印度獨立運動は此の奸惡なる英國勢力を一擧に覆滅せんとするものであります。從來印度の獨立運動が絶對の正義に立脚し、従つて必ず貫徹されるべき主張なるにも拘らず遂に成功するに到らなかつた唯一の理由は、武力の缺如でありました。然るに其の武力は、大東亞十億の民に代つて米英撃滅の戦端を開いた日本との提携に由つて茲に奮らされたのであります。獨立運動の成功は期して待つべしであります。大東亞戦争は米英兩國の大東亞全民族に對する壓迫を粉碎し、大東亞諸民族をして其の本然の自由にして至高なる地位に復歸せしめんとするものであつて、必勝不敗の態勢は既に完成して居るのであります。大東亞の諸民族を奴隸化せんとした利己的自由主義の所有者米英は、今や自己の罪業に由つて崩壊せんとして居ります。同時に米英に由つて代表される物質偏重の誤れる文化は滅亡の前夜に在り、精神と物質との調和に立脚する永遠の文化が、今東方から全世界を光被せんとして居るのであります。大東亞戦争は實に滅亡に瀕する文化と興隆に向ふ文化、形骸化する秩序と生々躍動の秩序、虚偽と眞實との決戦であります。従つて我等の勝利は歴史の必然であり、神の意思であります。本夕此處に御出席の來賓各位は單に印度の先覺者たり指導者たるに止らず、新しき調和的世界建設の使命を有する偉大なる使徒であると信じます。大東亞諸民族の代表者が一堂に會して懇談すると云ふ今度の歴史的事件を契機として、苛酷なる試練の下

にも死生相結ぶ緊固なる團結力を以て、宿敵米英撃滅の途に邁進せられん事を希望致します。最後に財團法人日印協會に就て若干説明致します。日印協會は日印兩國の親善關係増進を目的として一九〇三年東京に創立され、前後約四十年に互つて其の事業を經營し來つたものであります。本會事業中の主要なるものは、日印相互間の商工業の調査、印度學生に對する盡力、來遊貴顯名士の歡迎、會報其他圖書の刊行、甲谷陀商品館の經營等でありました。今後も時宜に應じ有效なる活動を行ひ、日印兩國の理解と提携を強化する爲に微力を致し度いと存じます。各位の絶大なる御支援と御協力を期待する次第であります。

ボース首班答辭(要旨)

本夕は私共の爲に斯くも多数の名士が御參集下さいまして有難う御座います。是は實に日本の全國民が印度問題に非常なる關心を持つて居られることの一證左であると考へ、衷心より感謝の意を表する次第であります。承りますれば此會を御開催下さいました日印協會は、一九〇三年以來約四十年に互つて日印親善の爲に不斷の奮闘を續けて來られたさうであります。私は斯かる長年月の努力が如何に困難であるかを熟知するが故に、關係者御一同に對し尊敬の念を禁じ得ない者であります。而も其の四十年の御努力が今や結實せんとする時期に遭遇して居るのでありますから、此上一層の御活動と御援助とを御願ひ致す次第であります。繼つて我等の事業たる印度の獨立運動を考へますと、愈々最後の段階たる武力闘争に突入する事になりました。我々は斯る千載一遇の好機を恵れたる以上、必ず在印敵勢力を一掃せん事を誓ふ者であります。

ボース首班大講演會

本會は去る十一月十四日午前十時より大政翼賛會興亞總本部並に大日本翼賛壯年團との共同主催の下にスバス・チャンドラ・ボース自由印度假政府首班大講演會を日比谷公會堂に於て開催せり。當日聴衆は早朝來陸續會場前の廣場に參集して開場を待つ程の盛況を呈したるが、場内満員の爲餘儀無く入場を謝絶したる者約一千五百名の多きに達したり。先づ副島理事の開會の辭に次で、興亞總本部宮田本部長の挨拶後、ボース首班は外務省柿坪事務官の通譯に依つて一時間半に亘る熱血の大獅子吼を試みた。次で大川周明博士の激勵の辭、後藤翼賛會副總裁の發聲に依る 聖壽萬歳、大隈會頭の發聲に依る印度獨立萬歳を以て第一部を終り、第二部に於ては日本放送協會の「印度國民軍行進歌」の發表、演奏並に贈獻式あり、午後一時十分盛會裡に散會せり。

開會の辭

日印協會 副島 八十六
専務理事

今般自由印度假政府が組織され、印度の最も有力なる志士スバス・チャンドラ・ボース先生が歴倒的人望を擔うて其の首班に推され、ガンヂー翁の無抵抗主義を切り破つて獨立義勇軍を編成し、敢然陣頭指揮の衝に當られる事になりましたので、本日此の壇上から親しくボース將軍の獅子吼を聞く爲に三團體聯合演說會を開催致しました所、斯の通り滿場立錐の地も無い程、多数の有志諸君が御參

集下さつた事は、日本國民全體の印度に對する同情が如何に熾烈であるかを證明して餘りありと信じます。主催者側としては洵に欣快に堪へませんが、ボース將軍も定めし諸君の熱誠に感激して、愈々勇んで一路デリーへ進軍せられるであります。聖雄ガンヂー翁は其の半生を無抵抗主義の大旗を擧げて惡戰苦闘せられました。無抵抗主義は魂の力強い表現であるが、畢竟無手勝流の戦法です。此の戦法は如何にも高尚ではあるが、然し餘り高尚過ぎて其の言葉を解しない者には通用しません。敵英國や其の尻馬に乗つて盲動する米國のやうな老翁にして而も悍猛なる殆ど鬼畜にも比すべき手合に對しては、全く馬の耳に念佛です。何としても降魔の利劍を眞向上段に振り翳して退治するより外に斷じて方法がありません。然し乍ら彼英國は過去約二百年に互つて有らん限りの力を盡して印度を支配し、抑壓し、全世界に於て其の霸權を掌握し來つたしたたか者です。相手に取つて不足は無いが、彼の呼吸の根を止めるのは實に容易の業では無い。我が皮膚を斬らせて敵の肉を斬り、我が肉を斬らせて敵の骨を斬り、遂に敵を亡ぼして仕舞ふのが我國の剣道の極意です。武士道の骨髄です。ボース將軍の印度國民軍はデリーに突進する途には全滅に終る覺悟が肝要です。味方の屍の上に自由印度が初めて建設されるのです。日本は大東亞戦争開始以來、國家の運命を賭して凡有る犠牲を拂つて占領した所の緬甸にも比律賓にも立派に其の獨立を許しました。世界戦史の何處に斯様な公明正大な事實がありますか。全く人類有つて以來の破天荒の聖業であります。日本が全力を擧げて印度の獨立を應援するのも亦同一の日本道の發揮です。由來人道と正義

の貫徹が日本の使命です。只敵英米が之を理解せぬだけの事です。然し印度としては飽く迄も自力本位で奮闘する決意が大切で、此の決意があつてこそ、日本の助太刀が大に役に立つのです。

最後に一言ボース將軍に進言致します。今日の印度國民軍は勿論、將來愈々印度獨立の目的達成の曉、印度に取つて最も大切な事は國民間の一致和合です。印度國民同志が相剋摩擦に由つて英國をして乗せしめたやうな過去の弱點を根本的に清算して、印度全體の團結力を一層鞏固にする事が印度に課せられた最大の責任です。我が葉隠武士道に『敵に勝つには先づ味方に勝つ』と言ふ一句があるのは、此處の事です。印度獨立の要諦も亦此の一言に盡きると信じます。其處でボース將軍は此際是非とも日本建國以來の歴史、特に明治維新の先覺志士の犠牲的精神を學んで頂きたい。此の精神は、今日我が陸海空軍將士は固より、日本國中に充滿して居る點を十分御認識下さい。

印度は歴史上世界の大国であります。此の大国が一旦其の獨立を回復して動き出し、印度本然の姿を現した時こそ、大東亞全域は勿論、博く全世界に對して大なる衝動を興へるでありませう。

茲にボース將軍の目出度き首途に際し、偏に御武運の長久を祈り、一日も早く完全なる自由印度の出現を期待し、以て開會の辭と致します。

邦樂進出問題研究会

去る十二月二十二日午後四時より丸ノ内常盤家に於て邦樂の南方及印度進出問題研究会を開催せり。田中博士提出の話題を中心に晩

安川理事の逝去

大正十三年十一月本會理事に就任以來多年會務に盡瘁せられたる安川雄之助氏は近年健康を害し専ら靜養中の處藥石其效を奏せず遂に去る二月十三日逝去せられ超えて同月十七日品川区大井林町の自邸に於て葬儀を執行せられたり。本會より靈前に供したる弔詞左の如し。

弔詞

昭和十九年二月十三日本會理事安川雄之助翁逝く嗚呼悲哉
翁は我が日印協會の事業を翼賛して大正十三年十一月理事に就任以來多年會務に參畫し以て今日に至れり。本會が國際團體の一として頼に内外の認識を博し特に大東亞戰爭勃發以後會務は俄然繁劇を告げ著々任務遂行に邁進するに至りたる者固より時運の然らしむる所なりと雖も君の努力に負ふ所尠からず而も本會設立の目的達成は寧ろ將來に在り翁が推輓に俟つ所愈々切なるを感ずるの秋に際し溢然其訃音に接す哀悼何ぞ勝へん今や翁逝いて本會は有力なる柱梁を失ひたりと雖も我等會員一同は翁の遺志を繼承し益々會務の發展を期せんとす在天の英靈庶幾くば冥助を垂れよ

昭和十九年二月十七日

財団法人日印協會會頭

正三位勳二等侯爵 大隈 信 常

印度反英抗爭史展覽會

會務記事

餐の前後約三時間に互り別項所載の如き意見の開陳あり、午後八時半散會せり。當日の出席者左の如し。

- 田中正平法學博士 積重遠 田邊尙雄
- 堀内啓三 榊源次郎 黒澤隆朝
- 副島八十六 廣瀬又六 永田藤次郎
- 三角佐一郎

寄附行爲一部改正

本會は最近事業擴張の結果理事増員の必要を生じたるを以て、寄附行爲第二十條の「理事十名乃至二十名」とあるを「理事十名乃至二十五名」に改正する事となり、正規の手續を経て之を決定せり。

理事の新任

今回種田健藏氏には東洋紡績株式會社代表として、又潮崎喜八郎氏には日綿實業株式會社代表として、何れも新に評議員並に理事に就任せられたり。

理事の更迭

本會理事大塚俊雄氏には先般三井物産株式會社常務取締役辭任の結果として理事辭任の上其の後任として同社取締役會長住井辰男氏を推薦せられ、同氏は再び本會の理事に就任せらるゝ事となり。

自由印度假政府の緬甸進出を契機とする印度獨立運動の飛躍的發展に鑑み、大政翼賛會興亞總本部主催本會協贊の下に去る三月十六日より同月二十六日迄東京三越本店に於て印度反英抗爭史展覽會を開催し江湖の多大なる反響を呼び好評裡に閉會せり。尙大阪、神戸、岡山、高松、福岡、熊本等の各地に於ても順次開催の筈。

日印協會評議員會

從來毎年度末に評議員會を開催したるが本年は時局に鑑み其の便法として評議員會開催に代ふるに各評議員宛に昭和十九年度豫算及役員改選の兩件を議題とせる原案同封去る三月二十四日附書留郵便を以て賛否表示方を照會せし處、同月三十日迄に評議員總數八十七名の内七十一名より全部原案に賛成の旨回答に接し、茲に評議員會の手續を完了せり。

日印協會總會

去る四月十四日午後二時華族會館に於て總會を開催せり。出席者は左記三十三名にして先づ會頭大隈侯爵開會の辭を述べ、次で副島專務理事より昭和十八年度事業報告及決算報告を爲したる後滿場一致之を可決して總會を了へ、引續き外務省小瀧政務局第五課長より最近の印度事情に關し約五十分に互る講演あり、時局柄多大の注意を喚起して午後三時半散會せり。

出席者

綾 貞之助 江商株式會社

星

(一一三)

- | | | |
|----------|-------|--------|
| 細田孝三郎 | 飯島甲藏 | 池田嘉吉 |
| 石橋鎮雄 | 井上清太郎 | 木村日紀 |
| 兒玉謙次 | 三原信一 | 三宅川百太郎 |
| 眞島彦次郎 | 三輪政一 | 松岡正男 |
| 日商産業株式會社 | 大橋八郎 | 佐藤大隈信常 |
| 大阪商船株式會社 | 大高登 | 佐々木龍山 |
| 住井辰男 | 角田政之助 | 鹽澤昌貞 |
| 副島八十六 | 武田豐四郎 | 杉永正虎 |
| 山田俊三 | 山村樸次郎 | 山崎秀太郎 |
| 安本重治 | 吉田勳生 | 米澤菊二 |

印度國民軍激勵電報

曩に我國に來朝して朝野の歡迎を受け目下印度イムペリアルに進撃中のスバス・チャンドラ・ボース首班に對し去る四月七日日印協會會員一同を代表し大隈會頭名義を以て左記の通り打電せり。

電文

貴將軍が東亞各國在留印度人の壓倒的人望を擔うて自由印度假政府の首班に推され敢然印度國民軍を編成し大日本帝國の全幅的協力を得尙緬甸に於ける敵軍の反攻を撃破し更に印度東部國境インペリアルに進撃せられつゝある奮闘努力に對し予は日印協會會員全部を代表して深甚の謝意を表すると共に愈々勇往邁進一路デリーへ進軍して印度獨立獲得の目的を達成し東亞新秩序の建設に寄與せられんことを衷心より念願し茲に印度國民軍の武運長久を祈つて已ます。

會員の計報

前號會報發行後本會會員中左記諸氏の計音に接し洵に哀悼の至りに堪へず。茲に謹んで弔意を表す。

- | | | |
|------|------|--------|
| 安藤嶺丸 | 鈴木島吉 | 侯爵鍋島直映 |
| 森廣藏 | 金子直吉 | |

新入會員

通常會員

- | | | |
|--------|------------|-----|
| 平等通昭 | 在任 | 紹介者 |
| 脇山康之助 | 日印通商株式會社 | 東京都 |
| 遠藤哲夫 | 昭和通商株式會社社員 | 同 |
| 宮田齊 | 成女高等女學校校長 | 同 |
| 古川確悟 | 著述業 | 同 |
| 侯爵鍋島直泰 | 貴族院議員 | 同 |
| 渡邊甚吉 | 貴族院議員 | 同 |
| 鈴木修次 | 滿鐵東亞經濟調査局 | 同 |
| 鈴木秀茂 | 横濱正金銀行頭取 | 同 |
| 柏木秀茂 | | 同 |

會費領收報告

贊助會員會費

(自昭和十七年十二月一日至昭和十九年三月三十一日)

- | | | |
|-------------|-------------|--------|
| 金二千圓也 | 八馬兼介殿 | |
| 維持會員會費 | 金三百圓宛 | |
| 富士瓦斯紡績株式會社殿 | 服部玄三殿 | |
| 日商株式會社殿 | 島田一郎殿 | |
| 帝國人造絹絲株式會社殿 | 東洋レーヨン株式會社殿 | |
| 通常會員會費 | 金一百圓宛 | |
| 百枝繁雄殿 | 田中鐵三郎殿 | |
| 金三十六圓 | 大谷光瑞殿 | 西山勉殿 |
| 金三十圓 | 浦瀬義一殿 | |
| 金二十四圓 | 野口孝治殿 | |
| 金十二圓宛 | 安達謙藏殿 | 遠藤柳作殿 |
| 木下謙次郎殿 | 小林桂助殿 | 河田幸治郎殿 |
| 三島三郎殿 | 大森亮順殿 | 松田幸治郎殿 |
| 濱口俊介殿 | 池田正平殿 | 佐藤勝郎殿 |
| 小島元三郎殿 | 小泉又次郎殿 | 菊池謙讓殿 |
| 村田竹治郎殿 | 大野磯一殿 | 松本勝三郎殿 |
| 橋本萬右衛門殿 | 加茂喜一郎殿 | 澤本英三殿 |
| 小林房之助殿 | 間島與喜殿 | 木村日紀殿 |
| | | 三上信次郎殿 |

- | | | |
|-------------|----------|----------|
| 中川末吉殿 | 大塚伸次郎殿 | 鹽入亮忠殿 |
| 杉本信一殿 | 山上曹源殿 | 渡邊良吉殿 |
| 男爵山本達雄殿 | 山田俊三殿 | 山村四郎殿 |
| 金六圓宛 | 阿部市太郎殿 | 青木謙太郎殿 |
| 淺見宣三殿 | 映畫製給社金部殿 | 江尻隆之助殿 |
| 深町宗孝殿 | 浦生禮一殿 | 安部成嘉殿 |
| 秋山高殿 | 青木勝殿 | 淺井竹五郎殿 |
| 麻生正藏殿 | 海老原竹之助殿 | 遠藤哲夫殿 |
| 福島弘殿 | 合田儀三郎殿 | 阿部重兵衛殿 |
| 安藤正純殿 | 有馬長太郎殿 | 淺間龍藏殿 |
| 平等通昭殿 | 江田愿殿 | 鹽車喜一殿 |
| 古川確悟殿 | 濱田初次郎殿 | 長谷川基殿 |
| 早川市太郎殿 | 星一殿 | 井手復次郎殿 |
| 池田嘉吉殿 | 池田秀雄殿 | 今岡信一良殿 |
| 乾作郎殿 | 石井大殿 | 株式會社英商會殿 |
| 早川金部工業株式會社殿 | 星野義太郎殿 | 井手徳一殿 |
| 今井信之殿 | 井上清太郎殿 | 犬塚勝太郎殿 |
| 石丸志都磨殿 | 原田忠雄殿 | 林忠一殿 |
| 株式會社平尾洋行殿 | 市川榮次郎殿 | 飯島甲藏殿 |
| 生尾太郎殿 | 今村均殿 | 乾彦一殿 |
| 石橋鎮雄殿 | 伊藤愛吉殿 | 伊藤傳七殿 |
| 駒井三郎殿 | 賀來倫二郎殿 | 神谷忠雄殿 |
| 金津熊夫殿 | 鹿子木員信殿 | 神田啓三郎殿 |
| 加藤末雄殿 | 川畑敬太郎殿 | 川島浪遠殿 |

會務記事

伊藤源助殿	門野重九郎殿	賀來佐賀太郎殿
龜尾松治殿	金澤繁次郎殿	金丸文郎殿
神田晴年殿	加藤捨吉郎殿	川村喜十郎殿
川島辰之助殿	上甲信弘殿	楫喜雄殿
神林虎雄殿	加納藤右衛門殿	神田外茂夫殿
加藤加橋殿	河村務殿	河島利助殿
木村淺七殿	木下金藏殿	北川要之助殿
小寺源吾殿	國際電氣通信株式會社殿	倉持福雄殿
眞島彥次郎殿	松井茂男殿	木下乙市殿
北村七郎殿	小林千代吉殿	小林富次郎殿
小島龜三郎殿	小村捷治殿	草村松雄殿
榊源次郎殿	松本君平殿	桐生輸出物商會聯合會殿
北澤直昭殿	神戶野澤組殿	國際文具株式會社殿
小谷眞太郎殿	來馬琢道殿	増田義一殿
松本鐵治郎殿	松村昇殿	株式會社松崎本店殿
民族戰史研究所殿	宮本正尊殿	森平兵衛殿
村內光雄殿	內藤英雄殿	中井榮三郎殿
中村信太郎殿	中辻正信殿	松崎半三郎殿
松山晋二郎殿	三輪政一殿	三吉朋十殿
諸戶清六殿	村山威士殿	永野護殿
中井賢三殿	中島清一郎殿	南郷三郎殿
松岡正男殿	南直治郎殿	宮田齋殿
村田省藏殿	永島義治殿	內外編物株式會社殿
中村房次郎殿	仲谷芳雄殿	奈良自由市殿
成田圖書館殿	日本皮革株式會社殿	日本糖業株式會社金澤部殿

西 巖殿	西孫商店殿	野口周善殿
大竹貫一殿	大鳥居彦司殿	子爵岡部長景殿
奧平貞殿	夏秋龜一殿	日本磁器器工業聯合會殿
日本製靴株式會社殿	西田義方殿	西卷畏三郎殿
尾上次六殿	小川勝太郎殿	岡田善治殿
大倉邦彦殿	日本エナメル株式會社殿	日本絹袋株式會社殿
日本タイプライター企業部殿	西川重吉殿	西脇濟三郎殿
小野慶太郎殿	大谷登殿	小川太郎殿
岡内英夫殿	岡崎清一殿	大内暢三殿
尾崎行雄殿	坂口與三松殿	酒井吉之助殿
佐々木源藏殿	佐藤彰一殿	千田幸夫殿
下郷傳平殿	白石元治郎殿	副島義一殿
鈴木信治殿	パイロット墨年筆株式會社殿	酒井寛三殿
櫻井兵五郎殿	佐々木詰山殿	佐藤梅太郎殿
柴田一能殿	志村保一殿	莊司茂樹殿
末永一三殿	鈴木章之殿	エム・サハイ殿
眞崎大和鉛筆株式會社殿	三亞興業株式會社殿	笹倉貞一郎殿
佐藤勇太郎殿	下村齋次郎殿	進藤道太郎殿
庄司乙吉殿	杉田一次殿	橋伍三郎殿
立花俊道殿	高木陸郎殿	武見喜三殿
瀧川儀作殿	谷野彌吉殿	戸川濱男殿
東電電氣工業株式會社殿	友井春吉殿	鶴見左吉雄殿
臺灣銀行大阪支店殿	高田興業株式會社殿	竹村信一殿
田中穂積殿	田中善立殿	堅山南風殿
東京毎日新聞東亞部殿	友田貞吉殿	株式會社豊島商店殿

堤倉次殿	造洋紙株式會社調布店殿	高辻奈良造殿
武内金平殿	田中庄一郎殿	谷一東殿
田邊善人殿	東京時計機械株式會社殿	頭山滿殿
辻井盛司殿	内ヶ崎作三郎殿	上田喜平殿
和田恒輔殿	山田英太郎殿	山口無私郎殿
山元清一殿	山崎秀太郎殿	吉田勳生殿
上山厚吉殿	富田敏純殿	山口利國殿
山本發次郎殿	山本爲三郎殿	安本重治殿
吉田誠一殿	潮田方藏殿	渡邊知雄殿
山口茂殿	山本三藏殿	山成喬六殿
敬留製紙株式會社殿		

昭和十九年五月廿五日印刷
昭和十九年五月三十日發行

非賣品

日印協會本部
東京都麴町區內幸町二丁目二番地富國別館內

日印協會大阪支部
大阪府北區宗是町一丁目大阪商船株式會社內

日印協會甲谷陀支部
(休止中)

日印協會孟買支部
(休止中)

日印協會蘭貢支部
% Branch Office,
Yokohama Specie Bank, Rangoon.
東京都麴町區內幸町二丁目二番地

發行所 財團 日印協會
電話銀座(57)一〇七七番
振替東京一四九七三番
會員番號二二二一六三

發行所 東京都麴町區內幸町二丁目二番地

編輯者 三 角 佐 郎
印刷者 東京都神田區美土代町一六番地
(東京三五) 嶋 富 士 雄

印刷所 株式會社 三 秀 舍